

#### 4-4 気候変動による高層湿原の生物群集への影響調査

大項目	小項目	チェック	チェック項目	備考
影響予測手法 及び予測結果	(影響予測手法) 現況の再現性		現況を再現できている	本事業における観測データ及び過去の観測データを用いてモデルを改良しており、現況の水位を概ね再現できている。ただし、生物との関係については不確実性が残る。
		○	現況を概ね再現できているが、一部現況の再現が困難な点があった	
			現況再現を実施していない	
	(影響予測手法) 他地域での応用可能性		気候シナリオを入れ換えれば、他地域でも実施可能	水位計算のモデルは深泥池に特化したものであり、このまま他地域に適用することはできない。ただし、同様の環境の他地域において深泥池と同様のタンクモデルを作成できれば、水位の予測が可能。生物群集については場所により大きく異なるため、各地で調査が必要。
			気候シナリオに加え、他の入力データを入れ換えれば、他地域でも実施可能	
		○	本調査の対象地域のみ利用できる	
	(影響予測手法) 応用に必要な技術レベル		多くの行政担当者が自ら実施可能である	水位計算のモデルの作成や、生物群集の調査、影響の判断など、研究者等の指導がなければ実施が難しい面が多い。
			気候シナリオや影響予測モデルを扱うことができるコンサルタントや研究者のサポートが必要	
		○	研究者等の指導の下でなければ実施は難しい	
	(影響予測結果) 活用可能性		行政の活用の観点から、妥当と思われる予測結果が得られた	水位計算については、概ね妥当な結果と考えられる。生物群集と環境条件との関係については不確実な要素を含むため、継続的な調査によるデータ集積が望まれる。
		○	概ね妥当な結果と考えられ、行政で活用が可能であるが、さらに検証を実施することで、より精緻な予測結果が望める	
			行政で活用するためには、引き続き調査やデータ収集が必要	
適応オプション	適応策の妥当性		革新的な適応策を提示できた	将来の水位が渇水傾向になるという予測結果に対応した適応策を提示することができた。
		○	影響予測結果に対応した適応策を提示した	
			影響予測結果と必ずしも一致しないものも含め、分野の一般的な適応策の提示を行った	
	導入可能性		他地域で実施・導入が可能である	提示した適応策をそのまま他地域に適用できるわけではないが、考え方としては多くの湿地環境において応用可能である。
		○	本調査の対象地域でのみ実施・導入が可能である	
			本調査の対象地域で導入するには、さらなる調査、検討が必要である	
	他分野との関連性		他分野に相乗効果や副次効果が生じる	適応オプションによる効果は基本的には対象分野のみである。ただし、市民とともに実施することで普及啓発の面からも貢献できる可能性がある。
		○	対象分野のみに効果がある	
			他分野にマイナスの影響を与える可能性があるため、導入の際に留意が必要である	
	適応策の多様性		適応オプションを多様な視点から5つ以上提案できた。	適応策を5つ以上提示したが、影響の根本的な解決を図る適応策は1つであり、その他の適応策は影響の緩和に貢献しているが、やや間接的な適応策となっている。
		○	適応オプションを5つ以上提案できたが、調査対象の特徴などから適応策検討の視点が限られていた	
			調査対象の特徴などから適応策検討の視点が限られたため、提示できた適応オプションも限られた	

(※1) 現況の再現性とは、現在の状況を予測モデルが再現できている度合いのこと。通常、将来予測を実施する前に、モデルの妥当性を確認するため、現在の観測値等を利用して、予測モデルが現在の状況を再現できているか確認している。